

Title	ディドロ『修道女』における見かけと真実
Author(s)	中尾, 雪絵
Citation	Gallia. 40 P.59-P.65
Issue Date	2001-03-10
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/4761">http://hdl.handle.net/11094/4761</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ディドロ『修道女』における見かけと真実

中尾 雪絵

1760年八月から十一月にかけて、ディドロは友人たちへ宛てた書簡の中で、数回にわたり、執筆中の小説『修道女』を話題に挙げている。「私は『修道女』にかりきりです。原稿はペンの先からどんどん広がっていて、いつになったら、向こう岸へ着けるのか分かりません」(八月一日、ダミラヴィル宛<sup>1)</sup>)、「私はここへ『修道女』を持ってきました。時間があるときに書き進めるつもりです」(九月十日、滞在先のシュヴレットからソフィ・ヴォラン宛<sup>2)</sup>)、「再び私は『修道女』を書き始めました。[...]これはもはや手紙ではなく、一冊の書物です。この作品には真実があり、悲劇がありますが、私の書き方次第で、それらは強いものとなるでしょう」(十一月初め、デビネー夫人宛<sup>3)</sup>)。

これらの書簡からは、執筆に夢中になるディドロの様子がうかがえ、また『修道女』という作品名が何の説明もなく使われていることから、書簡を受け取る側も、この小説について多かれ少なかれ知っていたらしいことが分かる。だが同年十一月以降、書簡から『修道女』に関する記述はなくなり、再びそれが見つかるのは、二十年後の1780年のことである。「この作品は『運命論者ジャック』とは対照的です。悲劇的な場面がたくさんあります。大変面白い作品で、興味のすべては語り手へと集まるのです。[...]『修道女』という題ですが、かつてこれ以上にすさまじい修道院風刺が書かれたことはないと思います。」(九月二十七日、メステール宛<sup>4)</sup>)

1782年、『修道女』は長い歳月を経て、ようやく完成する。一度は書くのをやめた作品に、ディドロがどういった理由で再び着手することになったかは定かではものの、彼がこの作品にとりわけ強い執着を持っていたのであろうことは、想像に難くない。『修道女』は、シュザンヌ・シモナンという修道女が、「C侯爵<sup>5)</sup>」のために書く回想録である。彼女は、両親に強要されて入信するが、修道院での暮らしに耐えられず、修道院を逃げ出し、侯爵に救いを求めている。

メステール宛の書簡にも書かれているように、『修道女』は修道院に対する風刺の強い作品だが、このことは、小説の題がヒロインの名前ではなく、「修道女」と

1) Diderot, *Correspondance*, ed. Georges Roth, Les Éditions de Minuit, 1957, III, p.40.

2) *Ibid.*, p.63.

3) *Ibid.*, p.221.

4) Diderot, *Correspondance*, XV, pp.190-191.

5) Diderot, *Œuvres complètes*, Hermann, XI, 1975, p.81. なお、1875年アセザによって編集、出版された *Œuvres complètes* においては、侯爵の名前はイニシャルではなく *Croismare* となっている。

いう、彼女の身分を示したものであることから分かるだろう。この回想録を読めば、自分は修道女でありたくないという彼女の真の立場は明白である。だが、修道服を身につけ、修道院の内部で生活するシュザンヌは、外見的な立場からすれば「修道女」でしかない。「修道女」であるという表面と、自分は自由なのだという彼女の内に秘めた思いとの間に生じる大きなずれが、シュザンヌの苦しみの原因なのである。『修道女』には、こうした表面的なものへの言及が多く見られるが、これらを通して、そこに込められたディドロの意図を探ってみたい。

### ・シュザンヌの見た修道院

回想録は、家庭での孤独な日々の回想から始まっている。弁護士であった父が、自分を姉二人と同じようにかわいがってくれないことは、シュザンヌにとって大きな不幸であった。このため、姉の結婚話が持ち上がったとき、両親から自分の修道院入りを聞かされた彼女は、むしろ喜んでこの提案を受け入れている。「私は家の中でたいへん居心地の悪い思いをしていたので、このことで悲しくはなったりはしませんでした。ですから私は、最初の修道院、サント・マリーへととても陽気な気分に入ったのです<sup>6)</sup>。」この時点で、彼女は自分の修道院生活はあくまでも一時的なものと思い込んでいた。だが、経済的に破産状態にあった両親の望みは、娘がその生涯を修道院で過ごすことだった。事実を知ったシュザンヌは、「自分は修道女になるつもりは少しもない<sup>7)</sup>」と抗議するが聞き入れられず、ほとんど力づくで修道女にされてしまう。

こうして特別な信仰心もなく、家庭の事情のためだけに修道女になった彼女が、初めて足を踏み入れた修道院という世界を否定的にとらえてしまうのも無理はない。殊に、自分を救ってくれるものと期待していた修道院長が、シュザンヌの両親を説得しきれなかったことで、シュザンヌは彼女への不信感を強め、修道院長になる人間は策略的であると強く批判するのである。

シュザンヌが何よりも嫌悪するのは、表面だけをとらえて、真実の部分には触れまいとする修道院長や修道女たちの態度である。

彼女たちは真実をでっちあげます。真実から虚を作るのです。そして、こうした侮辱的な企ての責任から我々を免れさせているのが、果てしない讃歌や神へ許しをこうという行為なのです<sup>8)</sup>。

初めて修道服を身につけたシュザンヌの外見を褒め、それでいて彼女の心情には耳を傾けようとしない修道院長や他の修道女たちの姿は、彼女たちが信仰心よりも前に、表面だけを修道服という姿でおおっているというイメージを呼び起こす。修道院という世界そのものが真実に見せかけているもの、表面的な存在であ

6 ) *Ibid.*, p.85.

7 ) *Ibid.*, p.86.

8 ) *Ibid.*, pp.91-92.

るといふ印象が、シュザンヌの告白によって繰り返し強調されている。

そうした中で、一人の狂気の修道女の存在は、修道院の真実の部分を引き出す役割を果たしていると言えるだろう。一室に閉じ込められていた彼女が逃げ出したところへ居合わせたシュザンヌは、狂気に操られる彼女の姿に、激しいショックを受ける。

私はこれほどおぞましいものを見たことはありません。この人は髪を振り乱し、ほとんど衣服を身につけていませんでした。彼女は鉄の鎖を引きずり、目は空をさまよっていました。自分の髪を引きむしり、こぶしで胸をたたき、走り回っていました。うなり声もあげました。自分とかわず他人とかわずのしり、窓を探しては身を投げようとしてました<sup>9)</sup>。

彼女こそ、修道院の生活が導くであろう結末を覆い隠すことなく示していると考えたシュザンヌは、この女性に「自分の将来の運命<sup>10)</sup>」を見る。理性を失った状況にある人間が見せる真の姿こそ、シュザンヌ自身の心を言い表していると言えるだろう。巧みな言葉で彼女を包み込もうとする修道院長と、修道院内を暴れ回る狂気の女性という対比は、修道院の表裏を象徴して印象的である。

### ・修道女シュザンヌ

伝記的な事実として、ディドロの妹アンジェリックが修道女であったことは、『修道女』執筆に少なからず影響を与えたものと思われる。というのも彼女は、自ら志願してカルメル派の修道院に入ったが、内部で迫害を受けて精神に異常をきたし、27歳の若さで亡くなっているからである。実際、ディドロは『修道女』の執筆段階で、ヒロインに妹の名前をつけているほどである<sup>11)</sup>。

『修道女』のシュザンヌは、修練期間は「修道院の生活においてもっとものんびりしている<sup>12)</sup>」と同時に、もっとも誘惑的な時期であると述べている。そして、「私が自分を神に捧げるときのくることを切望してしまったことが何度もあるなどと、侯爵様に想像できますでしょうか<sup>13)</sup>」と、修練長や修道院長の巧みな言葉に操られそうになったことを告白している。ディドロは『運命論者ジャックとその主人』においても、修道院が若者にとって魅力的なものと映ることがあると否定的に述べているが、これらは若い時期に自ら修道院へ入りたがった妹アンジェリ

9) *Ibid.*, pp.92-93.

10) *Ibid.*, p.93.

11) Pierre Lepape, *Diderot*, Flammarion, 1991. また Hermann 版の『修道女』への付記において、ディドロの娘ヴァンドゥル夫人が1806年七月七日、メステールにあてた書簡が紹介されている。彼女はここで、ディドロの妹アンジェリックについて触れている。それによると、アンジェリックは十八歳のとき、両親の意志に反して自ら修道女になったが、内部で迫害を受け、二十七、八歳で狂気に陥って死亡した。「この妹の運命が私の父に『修道女』という小説の着想を与えたのです。」*Diderot, op.cit.*, « Appendice », 16, p.290.

12) *Diderot, op.cit.*, p.91.

13) *Ibid.*, p.91.

ックに対するデイドロの解釈とも考えることができるだろう<sup>14)</sup>。

一時は修道院に魅力を感じたシュザンヌだが、この期間を過ぎると「ぼんやりするようになり、嫌悪感が目覚めて、それが次第に大きくなっていく<sup>15)</sup>」のを感じるようになる。そして修道誓願の式の日になると、シュザンヌは緊張のあまり歩けなくなり、意識が朦朧としてしまう。その結果、彼女の意志が問われるはずの場において、まったく見かけだけの儀式が執り行われるのである。

(司教)あなたはまったく自分から望んで、自由な意志でここにいますか。 私は「いいえ」と答えました。しかし、私につきそっていたものたちが、私に代わって「はい」と返事をしました<sup>16)</sup>。

このような形ばかりの儀式は、その後も繰り返され、シュザンヌは常に他人の返事や強制によって、自らの意志を問われる場で自らの答えを述べることなく、これらを通してしてしまうのである。彼女は自分を「悪い修道女」と考えているが、それは自分の意志に忠実であることの結果とも言えよう。また彼女は、「自分はこれまでも修道女という身分には不満でしたし、今も、そしてこれからも一生、不満だろうと思うのです<sup>17)</sup>」と訴えてもいる。修道服を身に着けているという事実と、「世間に出たい<sup>18)</sup>」と願う自分の内面との違いこそ、彼女に「悪い修道女」という意識を与えるのである。

だが、修道院の外へ出れば、彼女は本当に自由を得られるのだろうか。ロンシャン修道院からアルパジョンの修道院と次々に修道院を変わりながらも、常に修道院の外の世界へ出たがっていたシュザンヌは、小説の終わり近くで、ついに修道院からの脱走に成功する。そしてパリで密かに生活し始めるが、そこで彼女は知らず知らずのうちに身についてしまった修道院での自分の習慣に気づくのである。

私は一度も修道院の精神を持ったことはないのですが、私の振る舞いにはそれがひどく表れているようです。けれども私は修道院生活でのお勤めに慣れてしまっており、それを機械的に繰り返してしまうのです。例えば、鐘がなるとしますね。私は十字を切ったり、ひざまずいたりしてしまいます。だれかが戸をたたきます。私は「アヴェ」と言ってしまう。質問をされるとしますね。すると、はいやいいいの答えの終わりに必ず、マザーやシスターとつけてしまうのです。[...] 私の仕事仲間は笑いだし、私が修道女のまねをしているのだと思っています<sup>19)</sup>。

14) Diderot, *Œuvres*, II, « Bouquins », Robert-Laffont, 1994, p.841.

15) Diderot, *Œuvres complètes*, Hermann, XI, p.92.

16) *Ibid.*, p.100.

17) *Ibid.*, p.153.

18) *Ibid.*, p.153.

19) *Ibid.*, p.286.

修道女であることを法に訴えてまで拒んだシュザンヌが、機械的に行う修道院特有の言動は、あくまでも習慣による反応であり、神への深い信仰心などを伴うものではない。だが、成り行きで修道院へ入った彼女ですら、日々の生活によっては次第に修道女としての仕草を身につけてしまうという、一見何気ないこのエピソードは、修道院の外の世界へ出てもつきまとう彼女の不幸な運命を皮肉に物語っている。

### ・『修道女』序文の「真実らしさ」

『修道女』が完成までに二十年以上もの年月を要したことは先に述べたが、この小説に付けられた序文が、それ以上に複雑な背景を持っていることはよく知られている。特に序文の執筆に関して言えば、ディドロ一人が書いたものではなく、ディドロの友人グリムが1770年に書いた原稿がもとになって書かれたものであるという事実を挙げることができる。グリムの記事は、1760年のある出来事を回想する内容で、その出来事こそが『修道女』執筆のきっかけとなるのだが、1770年という数字を見れば明らかなように、この当時はまだ『修道女』は完成していなかった。

ディドロは、グリムの原稿を自らの小説の序文にするにあたり、グリムの書いた冒頭部分を大幅に削除すると同時に、幾つかの新たなエピソードを足している。新たに書き加えられた部分に共通するのは、それらが出来事、すなわち実話に関する補足ではなく、その出来事をきっかけに書かれた小説の執筆に関するエピソードであるということである<sup>20)</sup>。つまりこの序文は、修道女の告白録という体裁をとった小説『修道女』が、まったくの創作であることを表明し、またその創作がどれだけ真実らしさを帯びているかを論じているのである。その結果、序文は偽の手紙にまつわる物語、偽の手紙とそれに対する返事、そして創作論と様々な文学要素を盛り込み、しかもそれらが密接に結び合わさったものとなっている。

この序文によれば、偽の手紙はディドロが中心となって計画・実行された仲間内のいたずらであった。ノルマンディの領地へ帰ってしまった友人クロワマル侯爵をパリへ呼び戻すための方法を考えていたディドロは、侯爵がパリを発つ少し前、「世間で、両親に強要された修道誓願を法に訴えていたロンシャン修道院の若い修道女が話題になっていた<sup>21)</sup>」ことを思い出す。敬虔なことで知られるクロワマル侯爵は、この修道女の名前も知らないまま、パリの高等法院へ出掛けるなど、彼女のために働きかけたものの、不幸にも「シスター・シュザンヌ・シモナンは裁判に敗れ、彼女の誓願は正当なものだと判断されたのだ<sup>22)</sup>。」

ディドロはシュザンヌ・シモナンが修道院を逃げ出したことにして、彼女の名前で手紙を書き、侯爵に送る。こうして、手紙の真性を「少しも疑わなかった<sup>23)</sup>」

20) Herbert Dieckmann, « The Préface-Annexe of *La Religieuse* », in *Diderot Studies*, II, 1952, pp.21-147.

21) Diderot, *op.cit.*, p.28.

22) *Ibid.*, p.28.

23) *Ibid.*, p.29.

侯爵とディドロ、すなわちシュザンヌとの間で書簡が数か月つづいた後、シュザンヌが病気で亡くなったことにして文通は終わる。そして、その間にディドロはシュザンヌの修道院での生活を回想録にしようと思い立ち、執筆を開始する、というのが序文の物語の大筋である。

気をつけなければならないのは、この序文に書かれていることの真実性を見極めることである。例えば、侯爵と架空の修道女との往復書簡が実際に行われたものであることは、ディドロの書簡によって明らかだが<sup>24)</sup>、一方で裁判を起こした修道女の名前は実際の修道女の名前とは異なっているうえ<sup>25)</sup>、裁判を起こしたときの彼女は既に四十歳を越えているなど、歴史的な事実との違いもあるからである<sup>26)</sup>。さらに、語り手も問題となる。というのも、序文の語り手はグリムであり、彼が友人ディドロの作品や、それにまつわる話題を論じているのだが、にもかかわらず現実には、「序文」の執筆者がディドロであることは明らかな事実なのである。彼はグリムの原稿に手を加える際に、語り手をグリムのままにしておき、自分自身に関するエピソードも三人称で描いている。つまり、この序文は表向き、すなわち作品として表れた形としてはグリムが語り手であるという見かけを保っているということになる。

ディドロは序文に新しく書き足した「文学者への質問」と題する段落において、創作の結果として美しさをとるか、真実らしさをとるか論じているが、これこそ友人グリムが語り手であるという設定が可能にした描写であろう。

ディドロ氏は、巧みに書かれ、十分考えられ、きわめて悲劇的で、実にロマネスクな手紙を書いて何日も朝を過ごし、さらに何日もかけ、妻や、彼の悪い仲間たちの忠告に従って、目立つところ、誇張されたところ、簡潔さや真実らしさに反するものを削除して、それらの手紙の美しさを損ねることになった<sup>27)</sup>。

ここで「真実らしさ」を追及するという姿勢を表明したディドロは、さらに「文学者」に向かって、「(美しい手紙と真実の手紙では)どちらがよくできた手紙だと言えるだろう。賞賛を得る方だろうか、それとも必ずイリュージョンを引き

24) 1782年にディドロは写稿者のジルバルに次のような書簡を送っている。「グリム氏がシスター・シュザンヌの手紙と侯爵の返事をメステール氏に預けていますので、それを彼の原稿の順序に従って写して下さい。」(1782年二月、ジルバル宛) Diderot, *Correspondance*, XV, p.291.

25) Georges May, *Diderot et « La Religieuse »*, Paris et New Heaven, Yale University Press et Presse Universitaires de France, 1954, p.47. 実在する修道女の名前はマルグリット・ドラマルであった。メイは本書の三章において彼女の人生を詳しく説明している。それによるとマルグリットの両親は、三歳になったマルグリットをバリ近くのロンシャン修道院に入れている(小説ではシュザンヌが修道院入りしたのは十六歳のときである)。またシュザンヌと同じく彼女は複数の修道院で生活しているが、その中にはシュザンヌが一番最初に入るサント・マリ修道院も含まれていた。

26) *Ibid.*, p.47.

27) Diderot, *op.cit.*, p.66.

起こす方だろうか<sup>28)</sup>」という疑問を投げかけている。この疑問に明白な答えは書かれていないが、誇張を避け、真実らしさという効果を強調するデイドロは当然、後者に軍配を上げていたはずである。

『修道女』序文において、デイドロは「真実らしさ」という主題を文学の技法として論じると同時に、序文そのものの真実性を高めるために、その技法を駆使した創作を織り混ぜた。その結果、もともとは仲間内のいたずらに過ぎなかった出来事が、強い風刺を込めた作品へと昇華されていくという過程すら、デイドロによってそれらしく整えられた筋立てであるかのような曖昧さが生じる。一方、『修道女』においては、「真実らしさ」がむしろ否定的な主題、すなわち表面的なもの、真実でないものとして、それが修道院への批判へと還元されている。シュザンヌの目を通して読者に示される修道院のイメージ、特に彼女の苦しみや怒りといった感情の生々しい描写を重ねることで、デイドロは修道院という、閉鎖的で隔絶された世界への疑問を投げかけようとしたのではないだろうか。

(D. 在学中)

---

28) *Ibid.*, p.67.